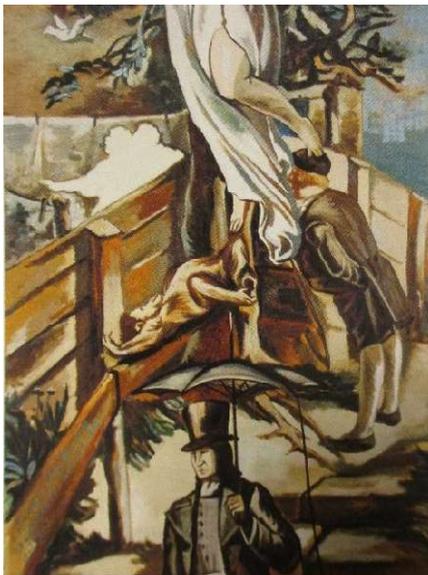


『シュルレアリスム宣言』100年 シュルレアリスムと日本

板橋区立美術館 前期 24. 03. 02~04. 14 後期 03. 26~04. 14

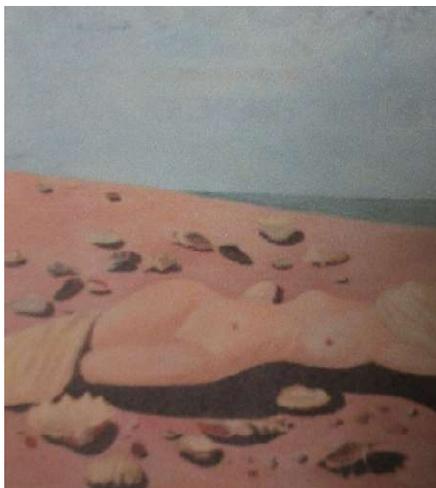
本年は、1924年「アンドレ・ブルトン」が「シュルレアリスム宣言」を発表して100年の節目となるが、このフランスで誕生した詩や思想、絵画に大きな影響を及ぼした芸術運動は、当時の日本の画家たちを魅了した。「よく分からない」と敬遠されがちな「シュルレアリスム絵画」であるが、様々な技法を用い「超現実」に迫ろうとした作品は、何れも目を見開かされる程新鮮である。

日本では、大正、昭和を経て開花した芸術運動を振り返る“魔訶不思議な絵画が残したもの”とは、わが国の先駆者（キーパーソン）は、パリ留学中「シュルレアリスム」の勃興を目撃した「福沢一郎」である。



福沢一郎 《他人の恋》1930年 油彩/
カンヴァス

雑誌の図版などを切り貼りして作ったイメージを油絵として描いた作品は、中空に浮かぶ女性の下半身、仰向きの猿、板堀を前に身をかがめる男、堀の向こうに白く描かれたシルエット、そしてこうもり傘をさす紳士の奇妙なモチーフが錯綜する画面は、見る者の理性を揺さぶり認識を混乱させる。むつみ合う男女、のぞき込む男、なまめかしい脚に、猿、傘をさす紳士など、関連性のない対象を並べて、強烈な違和感を演出している。



三岸好太郎 《海と射光》1934年 油彩/
カンヴァス

薄いピンク色の浜辺に、茶褐色の「ジョルジョ・デ・キリコ」的な影を描いた顔の見えない女体が横たわり、貝殻の散乱する浜辺の彼方は海と青空に繋がっている。画面を上から注ぐ強い太陽光とその影、白日夢のような幻想的な光景を現出し、乾いたエロティシズム、生と死を共存させた東洋的叙情をも漂わせている。